論　文

徳川慶喜居所考
―慶応三年の「将軍邸会議」―

Consideration of Tokugawa Yoshinobu's base of political activity: Meeting at the Shogun's residence in 1867

久住真也（大東文化大学文学部）
Shinya KUSUMI

はじめに

一五代将軍徳川慶喜は、終始在京将軍であったことは周知のことである。文久二年（一八六二）以降、政治の中心は京都に移り、一四代将軍家茂は内政・外交上の問題に対処するため上洛・滞京することが求められ、その延長線上に慶喜が存在したと理解できる。[1] 慶喜の将軍としての政治活動については、多くの先行研究によって説かれ、[2] 基本的な点はほぼ明らかになっている感がある。しかし、そこでは政局における行動の分析が中心であり、慶喜の活動基盤となる居所や、それと政治活動との関係については、いまだ不明な点が少なくない。

まず、慶応二年（一八六六）一二月五日に将軍宣下を受けた慶喜は、直ちに二条城に入らず、将軍後見職の時から滞在していた「御旅館」、通称「若州屋敷」に滞在し続けた。[3] このことは、大正七年刊行の渋沢栄一『徳川慶喜公伝』でも説かれ、[4] また古写真との関連でしばしば言及されてきたが、[5] これまでの研究は、慶喜の政治行動を考察するうえで、この点を十分に組み込んで論じてきたとは言いがたい。かつて筆者は、慶喜を「国事」に従事する活動的な将軍として捉え、それと若州屋敷滞在の関係について注目した。[6] また、藤田英昭氏は、若州屋敷が慶喜の将軍就任後しばらく「将軍の御殿」として機能したことを指摘し、一橋家時代を中心に同所の利用状況について指図を用いて検討しつつ、滞京中の慶喜の政治活動を理

解するうえで重要との理解を示している。[7] しかし、大方の研究傾向としては、将軍時代の慶喜の政治活動は、漠然と二条城を中心に展開されたと考えていると言えよう。

例えば、慶応三年上半期の政治争点となった兵庫開港・長州処分問題をめぐり、将軍慶喜が、松平慶永・伊達宗城・島津久光・山内容堂ら有力諸侯と度重なる会談を行ったことは、四侯会議の名称とともに知られるが、研究史上においては、会談場所は長く二条城とされている。[8] この二条城説は戦前に編纂された『島津久光公実紀』や『山内家史料』、『維新史料綱要』などの重要文献、先の『徳川慶喜公伝』にも見られ、古くからの定説とも言える位置を占めている。また、それに関連して、慶応三年五月一四日に行われた四侯と将軍慶喜の会談時に、慶喜の命によってなされた四侯の写真撮影も、二条城での出来事と説明され、後述するように長く諸書で踏襲されている。[9] しかし、以上の時期は、慶喜が若州屋敷を居所とした時期にあたっており、会談場所が二条城であるというのは自明では無いはずである。[10] 実際に、この時期豊富に残された史料を丁寧に読めば、二条城説には疑問があると言わざるを得ない。本稿はこの点について具体的に検討するものだが、従来の見解の批判に際しては、長年継承されたものであるだけに、史料を丁寧に検証する必要がある。

またその結果明確となった事実が、当該期の将軍の権力や政治スタイルとどのような関係にあるのか、一四代家茂の時代も視野に入れ、若干の私見を提示したい。なお、右のような限定された課題を扱う本稿では、江戸も含めた慶喜政権全体の評価は捨象されていることを断っておく。

一、将軍就任前後の「御旅館」

1、若州屋敷とは何か

まず、若州屋敷について基本的な点を確認する。同所は、幕末期に民間で板行された京都一覧図の類に「若州屋敷」や「若州」などとして、二条城の南西、神泉苑跡に隣接して描かれる。かつて将軍後見職であった慶喜は、文久三年一二月二一日に東本願寺から同所に宿所を移した。松平慶永はその情報を日記に記すなかで、「但一ツ橋旅館神泉苑へ西へ入ル御池通り」と記し、以後も「一橋旅館」などと呼んでおり、[11] また、一橋家では「京都御旅館」、「御池御殿」と呼んでいたという。[12] この最後の呼称に見るように、北は御池通、南は三条通に挟まれた場所にあることから、両通の名前を冠して呼ばれることがあり、[13] 若き日に同所で活動した渋沢栄一は、後年「三条屋敷」と呼んでいるので、[14] 慶喜周辺では「若州屋敷」という名称よりも、通名を冠した呼び方で通っていた可能性がある。

しかし、種々の史料によれば「若州屋敷」の名称も継続して用いられている。この名称の由来は、同所が酒井若狭守（小浜藩主）の屋敷であったことによるが、幕末期の藩主酒井忠義が二度にわたり所司代を務めていたことからも、隣接する京都町奉行所に加え、二条城を間にはさみ、向かい側（北）に位置する所司代や、その関連屋敷と有機的に結びついた場所であったと見るべきだろう。

この枢要の地は、第一回将軍上洛時に早くも注目され、文久三年二月に会津藩士は江戸の老中板倉勝静に対し、酒井家が京都警衛を免じられた

のを機会に、同所を藩主松平容保（京都守護職）の旅館としたいとの考えを上申している。[15] その理由として、容保が滞在していた黒谷の旅館から二条城までは遠く、「若州様御屋敷」ならば城に近く日々登城でき、かつ「所司代衆」も城に近く、好都合としている。板倉はこれに理解を示し、将軍上洛後に検討するとしていた。しかし、以後の経緯は不明ながら、結果として同年一二月二一日に一橋慶喜が同所に入ったのである。

この慶喜の動きは、二度目の将軍上洛に備えたものだが、関連史料を紹介すると、公家の中山忠能は文久四年正月二五日の日記に、「酒井若州二条屋敷建物凡撤却有之処、一橋旅亭ニ相成建物六七日之間造立余程ノ大造」で、日夜人夫が二万三千人ほど動員され、数日でできあがったとの風聞を記している。[16] また、幕府関係者と思われる情報では「一橋殿御事、二条若狭屋敷、是迄さら地ニ付、此度新規御殿御取建、昼夜之御普請ニて、当廿三日頃ニは御出来可相成候」とし、両三年の長期滞在となるとの予想を述べている。[17]

右の二つの史料とも屋敷に「二条」の通名が付されているのは注意を引く。この場合は通名ではなく、二条城を中心とした関連施設のひとつとして捉えられていたのだろうか。疑問は残るが、慶喜がこの場所に入ったのは間違いない。ただし、右の史料によれば、小浜屋敷をそのまま、あるいは増改築して利用したのではなく、新たに慶喜のために短期間の突貫工事で御殿が造られたことが分かる。その新規「御旅館」を示すのが、現在残された指図と考えられるが、[18] 場所自体はあくまで酒井家からの借用という形をとっていたらしい。[19] それゆえに、慶喜の新たな居館として、関係者が「三条屋敷」や「御池屋敷」と呼んだ可能性もあろう。

以後、この新たな「一橋旅館」には、文久三年一二月末以降翌年初めにかけ、慶喜と共に朝議参予となる、松平慶永・島津久光・伊達宗城・松平容保らとその家臣団が会し、国事を評議するようになる。『徳川慶喜公伝』は、このような状況に注目し、「新に一の政治機関を生じたり。初は二条城とありしに、後には便宜公の旅館に開議しければ、今仮に之を後見邸会議と名づくべし」と述べている。[20] この「便宜」的に旅館が評議場所になったという叙述は留意しておきたい。慶喜は参予会議解体を契機に禁裏守衛総督・摂海防禦指揮として朝廷と一体化していくが、その間一度も江戸に戻ることなく、同所を拠点に活動することになる。[21]

2、慶喜の将軍就任と若州屋敷

慶喜は、前述のように将軍宣下以後、内大臣就任までの約九ヶ月半の間、若州屋敷を依然居所としたと考えられるが、念のため史料から確認しておこう。慶喜は相続直後に大坂に下り、九月四日に帰京して以降も、当分「酒井若狭守屋敷」を御座所とする旨を所司代を通じて朝廷に上申し、[22] これは一二月五日の将軍宣下後も継続した。

尾張藩の作成と思われる柳営の動静を記した「京大坂御城書」の慶応三年三月八日の条には、「明九日四ツ時之御供揃ニて二条　御城え被為成、将軍宣下之御礼被為　請候ニ付…」とあり、慶喜が幕府諸役より将軍宣下の祝賀を受けるため、二条城に出向いたことを記す。二条城が居所ならば、わざわざ出向く必要はないわけである。そして続く一〇日の条は「公方様昨日午刻仮御殿え　還御被遊候」とあるが、[23] この「仮御殿」が、「御旅館」であることは他の史料でも確認できる。[24] 加えて、同年六月には、兵庫開港に関わる大坂町人七人が将軍のもとに召されたとする情報があり、

町人らは「当六日比　上様御座所若州屋敷え罷出候処…」という文言が見える。[25]

つまり、慶喜が将軍宣下に関わるような重要儀礼について二条城に出向くことはあるが、[26]「御座所」はあくまで「御旅館」＝若州屋敷であった。

この「御旅館」が「仮御殿」と称されたのは、慶喜が宗家を相続したことと関係がある。慶応二年八月以後のものと思われる巷間に出回った「万歳かへうた」という摺物の中に、「徳川の御相そくで。御代もおさまりまします。かり住ありける若州の屋敷も広まりあたり。見るもまばゆきふしんも出来揃けるハ誠にりつはに候ける」とあるように、[27]徳川家当主の御座所に相応しい改築がなされたらしい。ただ、あくまで二条城に入るまでの仮御殿と見られたのである。しかし、将軍宣下以降も、同所は将軍滞京中の旅宿という意味で、「京都御旅館」や、単に「御旅館」と呼ばれていく。

この「御旅館」の利用法については、慶応二年九月の情報として、「矢張下地之若州屋敷を御住居ニ被遊候得共、都て御用談等は二条　御城ニ相成り候趣御座候」、あるいは「徳川黄門…上京兼テ借用三条若州屋敷旅宿、昼ハ二条城ニ入リ旅宿ハ右若州屋敷ノ由」というものがあり、[28]これに従えば政治に関わる接見は二条城で行われたことになるが、実際はそうではなかったことは、以下に四侯会議を事例とした慶喜の政治活動を検討することで示したい。

二、将軍慶喜と四侯の会談

1、記録に見える「登営」と「登城」

新将軍慶喜にとっての当面の課題は、長州再征失敗により決定的に低下した幕府権力をどう立て直すかにあった。政局は慶喜に対して、長州藩の処分問題と、慶応元年一〇月の条約勅許の際に孝明天皇が中止を命じた兵庫開港問題（条約で慶応三年一二月七日が開港日とされていた）への、待った無しの対処を迫ることになる。前者は国内問題であるが、後者の解決（開港）は、条約締結諸国から新将軍として信任を得るうえで必要不可欠と慶喜は理解していた。ここに、薩摩や有力諸藩の理解を得て兵庫開港を推し進めたい幕府（慶喜）と、兵庫開港は許容しつつも、幕府の「反正」を見極める試金石として長州問題の解決を先決とする四藩（薩摩・越前・宇和島・土佐）の対立が展開することになる。[29]

また、慶応三年四月中旬、大坂滞在中のイギリス公使パークス一行が、幕府の承認のもと京都近郊を経て陸路敦賀にいたったことが朝廷で問題視され、幕府寄りと見られた議奏・伝奏の四人が辞任し、その後任人事をめぐり、朝廷首脳を巻き込み幕府と薩摩・宇和島などのさや当てが激しく行われ、幕・薩の対立は激化の様相を示していた。

当時の「賢侯」とされた松平慶永（越前）・伊達宗城（宇和島）・島津久光（薩摩）・山内容堂（土佐）は、朝廷と幕府双方の命を受けて、同年四～五月の間に相次いで入京する。四侯の将軍慶喜への謁見状況を示したのが表1である。これによれば、四侯はそれぞれ慶喜に複数回にわたって謁見しているが、四侯揃っての謁見は五月一四日の一回のみであり、容堂を除いた他の三侯揃っての登営は二回（うち一回は謁見なし）、慶永・宗

表1　四侯の将軍慶喜への謁見状況（慶応3年4月～8月）

登営日	登営した人物	備考
4月18日	松平春嶽	
4月20日	松平春嶽・伊達宗城	
5月13日	松平春嶽・伊達宗城	
5月14日	松平春嶽・伊達宗城・島津久光・山内容堂	四侯の写真撮影あり。
5月19日	松平春嶽・伊達宗城・島津久光	
5月21日	松平春嶽・伊達宗城・島津久光	慶喜の接見なし。
5月26日	山内容堂	暇乞い。
5月28日	松平春嶽	
6月 2 日	松平春嶽	
7月10日	松平春嶽	
7月23日	松平春嶽・伊達宗城	慶喜の接見なし。
7月28日	松平春嶽	
8月 4 日	松平春嶽	暇乞い。
8月16日	伊達宗城	暇乞い。

註　松平春嶽「登京日記」および「京都日記」、『伊達宗城在京日記』、『山内家史料　幕末維新』六、『維新史料綱要』七より作成。

城両人による登営は三回（内一回は慶喜への謁見は無い）見られ、あとは単独の謁見である。

右の謁見状況を詳細に知りえるものとして、松平慶永の日記[30]と家臣で家老本多修理の日記[31]、側向頭取による「御側向頭取御用日記」[32]があり、さらに伊達宗城・島津久光両者の日記がある。[33]管見の限り山内容堂自身の記録は目にできないが、同人に対する幕府の扱いは他の三侯と異なるところは無いので、さほど問題ではない。

まず、謁見（会談）場所を考える点で注目したいのは、右の諸史料が、将軍のもとに赴くことを例外なく「登営」と表現している点である（場所は明記しないことが多い）。また、当事者以外の種々の史料で見ても「登営」が多く、「登城」と表現する例はあるが、数は少なく、当事者ではない周辺の情報が主であるという特徴がある。

ところで「登営」とは、江戸城など将軍居所に出仕する際に用いられる。『日本国語大辞典』によれば、「幕府の役所・本城などに参上すること」「登城」などとあるので、「登営」と「登城」はほぼ同義である。また、関連して「営中」とは将軍の居所や城中などを指す。つまり、通常ならば将軍在京中は「登営」＝二条城への登城、「営中」＝二条城内となるが、前述のようにこの時期「御旅館」に滞在していた慶喜の場合、それは無条件で当てはまらないことに注意が必要である。

ちなみに、四侯が過去に二条城に頻繁に登城した際（文久三年の初度の将軍上洛時と翌年の参予会議の時期。島津久光の場合は後者のみ）の記録を確認すると、久光、宗城は「二条へ出る」「二条へ登城」「二条へ出仕」「登城」などとしており、管見の限り「登営」は見られない。[34]松平慶永については、『続再夢紀事』では「二条城に登営せらる」のように「登営」表記が多く見られるが、同書に引用された慶永の書翰では、「登城」と表現しており、また別の書翰では「登営」の語を用いるなど一貫していない。[35]ところが、これが慶応三年になると、いずれも例外なく「登営」という表現に変化、あるいは統一されている点に注目したいのである。

そして、より重要なのは、慶喜が二条城に居を移した九月二一日以降、四侯で唯一慶喜のもとに赴く機会があった慶永の日記には「登城」表現が「登営」表現とともに見られるようになり、家臣の記録では、一様に「登城」のみに変化しているということである。[36]

つまり、この場合、慶永については九月二一日以前には「登城」表現が見られなかったことが重要であり、家臣たちは、慶喜の「御旅館」滞在期間と、二条城のそれに対応して、「登営」と「登城」を書き分けていることが明らかになる。[37] これに従えば、表1にある四侯の慶喜への謁見場所は、いずれも二条城以外の場所ということになろう。その場所とは若州屋敷に他ならないわけだが、この点異論の余地が無いように以下確認しておく。

2、四侯の写真撮影場所はどこか

表1の冒頭四月一八日の謁見は、前日に幕府より慶永に対して、「明十八日四時過御旅館へ罷出候様可仕候」と達しているのが確認できる。[38] その二日後（四月二〇日）の慶永・宗城の謁見では、両者は泉涌寺に参詣後に登営するが、慶永は日記に「泉涌寺より三時後伏見街道…三条堀川橋より御池迄上り、御池通り御旅館へ、例之通り坊主部屋へ罷越休息…」と具体的に記し、[39] 宗城も「御旅館へ登　営…」と明記しているので、[40] 両日の「登営」先が若州屋敷＝「御旅館」であることに疑問の余地はない。

次に唯一の四侯揃っての五月一四日の「登営」であるが、写真撮影の場所も含め、複数の文献が二条城であると明記しているので、[41] 詳しく見ておきたい。この日のポイントは、それ以前から慶喜サイドが執拗に求めていた島津久光の「登営」であった。それは、朝廷人事や幕府の外交政策をめぐり敵対的な薩摩藩の懐柔を目的としたもので、四月段階より老中板倉勝静らは、慶永に対してその実現を働きかけていた。例えば、四月二七日に幕府目付の原市之進は、慶永側近の中根雪江に対して、「明後日比御旅館へ大隅守（久光）罷出候様いたし度候、小松帯刀呼ニ遣し明日歟相談いたし候様被仰付候」と伝え、慶喜が久光を「御旅館」に召す考えを示していたことが分かる。[42] 実際、久光に慶永と宗城を加えた三者の登営が五月朔日に計画されたが、薩摩側の辞退によって実現しなかった。その前日、幕府は慶永に対して「明朔日九ツ時過御旅館へ罷出候様可仕事」と伝達していたことが確認できるので、三侯の謁見が「御旅館」で行われるのは既定路線だったと理解できる。[43]

そして、容堂も含む四人が登営した一四日について、慶永・宗城・久光はいずれも日記に「登営」とのみ記しているが、これが「御旅館」を指すことは今までの流れから見て明らかであろう。そして前述のように、この日行われた慶喜の命による四侯の写真撮影については、今まで二条城中の出来事とされてきたが、写真撮影のみ場所を二条城に移して行うとは考えにくい。

これについては、戦前にすでに場所を確定する貴重な史料が紹介されているのは見逃せない。それは、慶喜の写真趣味について論じた松尾矗明「徳川慶喜卿（二）―初期アマチュアの大立物」が紹介した、伊達宗城が自分も含む四人の写真（後日慶喜から下賜された）に付した包紙に記した覚書（伊達家保存）である。そこには「慶応三丁卯仲夏十四日、京都大樹公御旅館於庭上横田彦兵衛写之、写真七月十一日室賀伊予守より伝賜」という文言があるよしであり、著者は、これにより撮影場所は「二条城内ではなく、京都若州屋敷旅館の後面ででもあらう」と考証している。[44] この写真は、右にある通り七月一一日、御側御用取次の室賀正容を介して松平慶永と宗城に下賜されたものである。[45] この史料は、管見の限り紹介される機会に恵まれず、[46] 対して慶永が四人の写真を衝立にした際の識語は図録などで目にする機会が多い。そこでは、日時は「慶応三年五月十四日」

とされ、「於京師営中令倶議国事、是日為慰其労賜酒、又出写真鏡、所俾描四人象者也…」と記されている。[47] この「営中」がこれまで二条城と解釈されて来たのだが、[48] 宗城と慶永の体験は共通だから、場所は「御旅館」であったと確定することができる。

以上のように、慶喜は国事に関わる四侯への接見を「御旅館」で行っていたことは明らかであり、四侯揃っての謁見である五月一四日以降、同一九、二一日の三侯登営も同じく「御旅館」である。[49] そして、五月二三・二四日の朝廷での兵庫開港・長州藩寛大処分の勅許以後も、表1に見える久光を除く三侯の慶喜への謁見は、若州屋敷で行われたと見て間違いないだろう。[50]

ここで念のため、二条城説をとる戦前に編纂された重要文献の記述を概観しておきたい。まず『徳川慶喜公伝』は、五月一四日も含めた四侯と慶喜の対談を「二条城会議」と表現している。[51] そこで、同書の叙述を検討すると、全体的に、史料では「登営」とされている部分を、著者が二条城への「登城」に読み替えていることが分かる。[52] 繰り返すが、この時期の「登営」は、二条城への登城を必ずしも意味するわけではない。また『島津久光公実紀』も五月一四日を二条城での謁見として、詳細に同日のことを叙述するが、史料として引用するのは先の慶永による衝立の識語のみである。[53] これが「二条城説」を証するものではないのは先に見た通りである。

『山内家史料』七の綱文も「容堂公二条城ニ上リ…将軍慶喜ニ謁ス」とし、典拠として、右に見た『徳川慶喜公伝』や『島津久光公実紀』のほか、藩士の記録などを引用するが、[54] そのうち『丁卯雑拾録』所載の五月一六日の差出人不明書状（「京都五月十六日出廿三日来着」）は、「一昨十四日ハ越州・宇和島・土州・薩州共　御旅館え登　営、　御目見之上於　御前御御料理被下置、御馳走沢山ニ御座候由…」とあり、かつ久光の行列の様子や「土州之家中」と思われる者たちが「営中　御旅館辺」を徘徊したことなどを報じており、[55] 綱文と引用史料に齟齬が生じていることが分かる。逆に典拠史料中の「中岡慎太郎手記」には「同十四日晴此日四侯登城初ての大論也と云」とあるが、容堂に近い要職にあった寺村左膳の日記には「御登営」とあり、中岡の手記をもって二条城とすることはもとよりできない。

その他の文献でも同様の誤謬が指摘でき、一部諸藩による報告や風聞書などにも「登城」表記が散見されるが、これまでの考証を否定するだけの性格は持ち合わせない。また、柳営の動静を記した「京大坂御城書」[56] が、四侯揃っての一四日の謁見のほか、それ以外の日の謁見も「登城」とするが、これも当事者の記録を優先すべきだろう。

三、若州屋敷における権威装置

それでは、右に見たような重要文献が、四侯の「登営」を二条城への「登城」と見なした理由はどこにあるのだろうか。それは、将軍が京都で諸大名に接見するのだから、当然二条城であるという先入観の存在が考えられるが、その他に研究者をも惑わす史料上の文言が考えられる。

例えば、慶応三年六月朔日に、肥後藩主細川越中守（慶順）の弟である細川澄之助が、将軍慶喜に御目見した際の史料を見てみたい。

六月朔日

一公方様今日御黒書院替席え出御
　巻物廿　金馬代　越中守養子　細川澄之助
　初て　御目見　　細川越中守
　巻物廿
　養子　御目見之御礼
右相済て　入御被遊候　　細川澄之助
右於御休息所　御目見被　　仰付候
　但　御目見被　仰付段大廊下替席おいて板倉伊賀守演達之、且御料理御茶御菓子等被下之候、[57]

ちなみに、このとき藩主慶順（越中守）は同席してはいない。また、続く同月一一日に元服御礼のため慶喜のもとに赴いた澄之助は、同じく「黒書院替席」の上段に着座した慶喜に対し、奏者番の披露により「御下段御敷居之内御左之方着座」し、その後慶喜の「喜」の一字拝領と従四位下侍従推任の規式が執り行われた。[58] この両日とも、場所は二条城ではなく「御旅館」＝若州屋敷であったことは、松平慶永の六月二日の日記に、「昨朔日細川澄之助御旅館へ登営之ところ、於御座敷上様へ初て之御目見有之、畢て於御休息御目見有之…今日御城坊主より承る」とあり、一一日については、「今日細川澄之助登営…」として元服以下の件を記し、末尾に「二条御城にてハなし、御旅館也」とわざわざ注記していることより明らかである。[59] 以上の情報は、御城坊主（若州屋敷に詰めていた者だろう）や肥後藩の留守居によるものである。

これを前に見た五月一四日の四侯登営と比較してみよう。[60] まず、四侯は登営して「坊主部屋」で控え、次に慶永は「桜之間替席」、他の三侯は「大廊下替席」で老中稲葉正邦を介して慶喜の御機嫌伺をしている。[61] この控席の割り当ては、史料で確認できる表1の四月二〇日の慶永・宗城の登営、および五月二一日の容堂を除く三侯の登営などでも確認できる。[62] 慶永は他よりも官位が高く（正四位上参議）、別席となったものと思われ、江戸城や禁裏御所と同様、官位ごとの控席が設けられていたことが分かる。[63] そのあと、慶永らは「御錠口」内の「御休息」で慶喜に謁見した。

右の「黒書院」「大廊下」などの文言に、「登営」という言葉が加われば、二条城での出来事と見誤っても不思議ではない。つまり、将軍の「御旅館」である若州屋敷は、「仮御殿」とも呼ばれたように、二条城の機能をも兼ね備えていたのである。おそらく、慶喜の宗家相続後に、儀礼遂行上の配慮を伴う間取りの改変などがなされたのであろう。

このような「御旅館」の空間は、登営した人々の「身体」を拘束する。四侯揃っての登営を前に、五月一〇日に薩摩藩邸で、久光・慶永・宗城が会合した際、久光は自分は初めての「登営」であり「営中の都合」を知らないと不安を口にしており、[64] その後五月一二日の土佐藩邸での四者協議の際も、久光は「今日も此通り終日着座にて窮屈いたし、明日又々長く被為待、於御前手を突居候へハ苦労千万にて候間、何卒明後日ニ候ハヽ可罷出」と述べて翌日の「登営」を拒み、さらに「登営之上間席口上其他」の心配を語り、慶永に「乍憚拙者ハ上席ゆえ、何もかも私のいたし候

通り被成候は、宜ク」と諭されているのは注目される。[65]

ここには、儀礼を通じての将軍の権威が、大名の身体を心理的に拘束する様がよく表されている。ちなみに、この久光の発言を二条城への登城を念頭に置いたものと解する向きもあるが、そのように解した場合、前述したように、久光が元治元年の参予会議の時期、頻繁に二条城に登城した事実との関係が説明できなくなる。久光が不安を重ねて口にしたのは、久光にとって、将軍の「御旅館」となった若州屋敷への登営が初めてであったからと考えれば、無理なくこの発言を理解できる。[66]

このような身体的・心理的負担を強いる儀礼という権威装置の存在は、「御旅館」が持つ「権威の将軍」としての側面を表したものに他ならない。[67]

先に柳営の動向を記した「京大坂御城書」が、四侯の「御旅館」への「登営」を、一律に「登城」と表現していたのは、「御旅館」での接見を、あえて二条城でのそれと見做していたからではないだろうか。慶喜はすでに見た細川澄之助以外にも、将軍と大名の君臣関係の確認を伴う大名世子の元服儀礼を「御旅館」で行っており、[68]同所はその意味では、江戸城・二条城・大坂城と変わり無い役割を果たしていたと言え、[69]戦前以来の文献の会談場所についての誤認は、ここに基づくと言えるのではないだろうか。

四、将軍慶喜の特質と政局

1、「親しみ」を見せる将軍

それでは、将軍慶喜の政治活動が「御旅館」、すなわち若州屋敷で行われたという事実は、いかなる意味を持つのだろうか。その前提として、何故慶喜は将軍宣下後に二条城に入らなかったのだろうか。『徳川慶喜公伝』は、これについて「思召す旨やありけん」としか述べておらず、史料的にも判然としない。一方、建築史や古写真研究では、慶喜が新たに二条城の本丸に居室（仮御殿）を建てていたためと推測している。[70]この本丸御殿の外観は、古写真で確認することができるが、同所を訪れた経験がある松平慶永が「逸事史補」のなかで「慶喜公本丸へ麁略ナル館ヲ建築し、尤女中幷近習斗り也」と証言しているように、[71]仮建に近い簡略なものであったと推測される。[72]前述のように、文久三年に慶喜が入った若州屋敷が数日の突貫工事で完成したという情報を考慮すれば、この本丸仮御殿の築造に、将軍宣下以降九ヶ月近く要したとは思えず、着工時期も判然としない。[73]

他方、先代家茂が長期滞在した二条城の二之丸御殿は健在であり、将軍の長期滞京に対応する奥向きの整備も行われていたと考えられ、宗家を相続した慶喜に入城する意思さえあればそれは可能であったろう。[74]しかし、すでに見たように、慶喜は逆に若州屋敷の大幅な普請を行っている事実からは、慶喜が二条城に移るよりも、若州屋敷への滞在に執着していたようにも見える。

慶喜は、慶応二年八月に正式に宗家を相続する直前、松平慶永に対して将軍職辞職の決心を判然と天下に示すために、当分「御旅館」に滞在するとの考えを示し、慶永の賛同を得ていた。また、同時期、「旧套」を脱して「改革」を行うために「御旅館」に滞在するとの意思をも慶永に示し

ている。[75] 二条城に入るか否かという問題は、高度な政治的な判断が絡んでいたことが伺える。

筆者はかつて右の慶喜の発言から、幕政改革断行と「御旅館」滞在の関連を指摘し、改革による組織の合理化・簡素化を指向する慶喜が、殿中での様々なしきたりから逃れ、臨機応変の活動を行うために二条城ではなく、若州屋敷滞在を選択したと解釈した。[76] つまり、使い勝手を重視したと見たのである。

ここで改めて考えたとき、将軍としての慶喜の行動や政治スタイルとの関係は、やはりひとつの着眼点たりえるのでは無いだろうか。すなわち、注目すべきは、慶喜の過去における将軍代行的な活動履歴である。この点こそ、これまでの研究が精力的に明らかにしてきた点であるが、慶喜は周知のごとく天皇・公家や有力諸侯との日常的な関係を取り結ぶことで、その存在感を高めてきた。その関係性は将軍に就任したことによって、消滅する性格のものでは無かった。なぜなら、将軍となった慶喜は、江戸ではなく京都に基盤を置き、かつ先代家茂の将軍就任時に比較して諸大名の支持も十分ではなく、有力諸侯の意見を重視せざるをえなかったからである。[77] つまり、将軍就任以前の慶喜の政治スタイルは、将軍になっても引き続き求められる性格のものであったと言えよう。

そこで、再び慶喜と四侯の対談に注目しよう。表1の慶永と宗城が登営した四月二〇日を例にとると、[78] 両者は「奥」の「御休息」で慶喜と国事について対話したのち、老中・若年寄も加えての酒宴となった。慶永・宗城は慶喜と盃の応酬になり、宗城は「大酔」して御礼言上もままならない有様となった。その宗城は日記に、「橋公之時之如ク御親敷色々御話有之、兵庫長州御処置等申合無服蔵申出候様、其他心付之儀モ可申述被　仰聞」と記している。[79]

この一橋時代のごとき「親敷」慶喜の対応は、事前に慶永が幕府目付川村一匡を通じて進言していたことであり、薩摩・宇和島・土佐三藩は当時「有名之魁たる者」であるとして、彼らの「心服」を得る必要を説き、それに慶喜が応えたものだった。[80] 特に、島津久光は反幕的な家臣団の影響もあって慶喜とは距離が見られ、宗城もそれに同調する傾向があった。慶永の家臣中根雪江は、「隅州（久光）をして正く導くハ大君（慶喜）の籠絡ニあるへき事」と考え、久光が「登営」の節、「感化喜悦之情を興さしめん事」を原市之進に説こうとしたように、[81] 将軍自身のパフォーマンスが求められていたのである。五月一四日の四侯登営時の写真撮影という余興の狙いも、そこにつながっている。

これ以後、慶永らが慶喜と「御休息」で対面する際に「喫烟」が許されるようになるが、提案した慶永は、老中の板倉に対して酒饌で饗する必要はなく、「御茶菓随意ニ頂戴、煙草も御免ニ相成、乍恐参豫御旧友之御廉にて、打くつろき御噺申上候様抔との御趣向ニ相成候方可然哉」と述べていた。[82] 右の「参豫旧友」の関係とは、いうまでもなく慶喜が将軍後見職時代のことである。「御旅館」の「奥」の空間では、将軍と諸侯の間に本来存在する上下関係は国事のもとに解体され、フラットな関係が構築されていたのである。

このような慶喜による四侯懐柔は、公家の間でも知れ渡った。例えば、正親町公董は四藩の家臣（おそらく薩摩か）を通じて情報収集につとめていたが、実父の中山忠能（新帝の外祖父・反幕府派）にあてた書翰において「隅州（久光）ハ三藩勧ニテ土（容堂）同伴一度登営、越宇ハ四度ツヽも出頭、樹居間ニテ酒飯ヲ出シ甚ナレナレ敷あしらひ、宇和ハ大沈酔越春ノ肩ニ掛リ退去ノ時も有之由…」と伝えている。[83] 前半部分は五月一四

日の四侯登営を指し、宗城の「大沈酔」は先に紹介した四月二〇日の慶永・宗城の登営時のことであるが、「親敷」将軍の姿は、反幕的フィルターを通じて見たとき、諸侯に媚を売るかのような「ナレナレ敷」姿に映ったのである。

ところで、将軍慶喜が「親敷」対応したのは四侯だけではない。これ以外に慶喜が長州処分問題の諮問目的で接見した人物として前佐賀藩主の鍋島斉正（閑叟）がおり、芸州藩主世子の浅野茂勲も謁見しているが、これら藩主に準じた人々は、いずれも「御旅館」の「御休息」で慶喜と親しく対面したのである。[84]

また重要なのは、「奥」の空間で展開された慶喜による国事への対応と、照応する性格を「御旅館」が持ち合わせていたことである。すなわち、同所には越前や肥後の諸藩士が「登営」し、老中・若年寄・大目付らと国事について接触するなど往来が頻繁であった。[85]同所には「周旋方役所」が設けられ、目付原市之進のもとに「一ツ橋之周旋方」であった渋沢成一郎・水島三四郎らが「幕府周旋方」として活動している点は注目できよう。[86]これは、諸藩との交際や国事周旋を担った一橋家の「御用談所」の延長線上に見ることができ、[87]「一橋旅館」の性格が将軍の「御旅館」に引き継がれていたことが分かる。

将軍慶喜の家臣団の重要性については、例えば、京都で情報を収集していた長州藩の品川弥二郎が、「当節之勢乍恐朝廷之権は幕府にあり、幕府の権は原、梅沢の方寸に有之、一橋と申ても世上評判ほどにも無之由にて、自分にも論を立て指揮する力は万々無之由、原、梅の両人にて全く天下之事が決するとは、実に悲歎之至り也」と報じたように、[88]目付の原・梅澤孫太郎の存在は大きかった。しかし、それにも関わらず、幕府の国事周旋の最も強力な担い手として、最後に期待されたのは他ならぬ将軍慶喜であった。

それは、越前藩の中根雪江と右の原市之進との会話に示される。すなわち、中根は幕府との間に風波を引き起こすのは、島津久光ではなく「其臣僚」であり、その「心腹」を得るための任にあたる人物を幕府中に存在するかを問うたのに対し、原は応えて板倉老中は大名であって下情に疎く、若年寄の永井尚志は老練だが気力に乏しいとし、「此上ハ矢張大樹公御自身に料理せらるゝ外なかるへし」と述べ、賛同する中根に対して、「非常の時機」には「非常の処置」が必要だとの考えを述べているのである。[89]中根は具体的に慶喜が直接薩摩の小松帯刀と大久保一蔵を召すことを提案していたのだが、将軍自身が藩士レベルの人物を相手に直に言葉をかけ、意見を問うという現象はもちろんそれ以前には思いもよらないことである。原が述べた慶喜自身による薩摩藩士の説得はもとより実現しなかったが、慶応三年一〇月一三日の二条城大広間における諸藩代表者に対する慶喜による大政奉還の表明と、その場での薩摩の小松帯刀や土佐の後藤象二郎らへの諮問となって、現実のものとなるのである。

2、政局の中の「将軍邸会議」

以上のことを、改めて文久期以来の政治の流れに位置づければどうなるだろうか。文久三年や元治元年に見られた「後見邸会議」のような、慶喜が幕府側を代表して有志大名らと政治的調整や評議を行う場は、慶喜が将軍になったことで存在しなくなり、また、それを代行する人物も見当たらなかった。そのため、将軍自らがかつての「後見邸会議」に類するものを主催する必要が生じたのであり、今まで見た四侯との会談は、場所

も同一であった点からも、「将軍邸会議」と称することは許されるだろう。将軍就任後に予想される兵庫開港や、長州問題における有力諸侯との意見調整の必要を考えれば、一橋時代からの「御旅館」の方が二条城よりも使い勝手が良かったのは当然とも言えるであろうし、前述のごとく「幕府周旋方」が設けられたのもその流れからして自然であった。

ところで、慶応三年の兵庫開港・長州処分問題前後の政局において、四侯会議が持つ重要性はつとに説かれてきたが、四侯の評議のみで最終的な政治的決定がなされる訳では無い。「将軍邸会議」や、同じく四侯が赴いた摂政二条斉敬邸での会議、それぞれが重要性を持って存在していた。これらの「会議」は、そのいずれもが十分な問題解決の場として機能しえなかったことは、五月二三日・二四日の朝議を前に、最後まで慶喜と薩摩の溝が埋まらず、朝議当日久光は欠席し、朝廷が慶喜と四侯の間に挟まれ右往左往したことに示される。

もうひとつ重要な点として、この「将軍邸会議」で見られた将軍の「親敷」姿は、一橋時代の慶喜の延長線上だけでなく、先代の将軍家茂の時期に見られた、将軍自らが国事の先頭に立つにいたった状況との連続からも見ておく必要があるということである。(90)

将軍家茂は、元治元年の二度目の滞京中、参予諸侯（島津久光・松平慶永・伊達宗城・山内容堂）らを二条城に頻繁に招き、酒や料理を振る舞っている。この時期日記を残している久光と宗城を例にとれば、両者は家茂が二条城に入った正月以降、四月までの間に六回の謁見を行っている。それは単独の場合もあるが、他の三侯、またはそのいずれかと同席することが多かったのは、四侯会議の際と同様である。

例えば、同年正月一九日の伊達宗城の日記によれば、二条城黒書院にて松平慶永・島津久光とともに家茂に謁し、御側近くに召されて盃を数度賜わり「大酩酊」しており、先に見た若州屋敷での「大酔」を想記させる。また、二月一六日には同じく二条城中の「一橋控所」において家茂自ら宗城・久光・容堂らに酌をしており、「我輩御ナツケ之御主意にハ可有之候得共、余り御威光無之筋恐入候」と宗城は日記に記している。(91) 両人の記録を通覧すると、場所は、黒書院、「御休息」、「一橋控所」など一定していない。この点、酒宴は「奥」の「御休息」で一定していた若州屋敷とは異なっている。(92)

家茂の場合は、国是決定のために参予大名の協力を意識した結果であろうが、若年の将軍によるけなげなパフォーマンスとも言える。しかし、家茂が慶喜のように四侯と活発な政治談義を行ったとは考えにくく、逆説的ではあるが、それゆえにいまだ将軍の優越的地位は保たれていたとも言える。また、将軍自身が藩臣への直接の対応を求められる状況でもなかった。しかし、慶喜にいたり、同じ目線で四侯と度重なる政治討議を行ったことに示されるように、近世以来の将軍の諸侯に対する優越性は崩壊していく。

五月二三日・二四日の禁裏御所の虎之間での公武両者の評議の座配において、中央の摂政・皇族二人に向かい、右側（南）の武家サイドに将軍慶喜と慶永、宗城が並んで座したことは、(93) 座順の先後こそあれ、朝廷において将軍と有力諸侯が「同列」に近い扱いを受けたことを示していよう。両者が拮抗した位置にあったがゆえに、強硬な慶喜の主張が通ったとき、薩摩の家臣団のみならず、久光の猛烈な反発を生み出したのである。両者の間に圧倒的な地位の差や上下関係が存在すれば、そのようなことは起こりえない。(94) 将軍が国事の前面に出ることによる相対的地位の低下という現象は、討幕運動あるいは大政奉還運動の動きとも決して無関係ではないのである。

おわりに

以上、本稿で明らかにした点をまとめると次のようになる。

①慶応三年九月二一日に将軍慶喜が二条城に移る以前、慶喜の主要な政治活動は、二条城ではなく「御旅館」＝若州屋敷で行われた。そのことを四侯会議を事例に明確にし、あわせて従来の研究史における叙述や、戦前の重要文献の誤謬を明らかにした。

②その「御旅館」は、「表」の空間は二条城の代用として機能し、儀礼空間を通じて将軍の権威を維持する役割を果たす一方、「奥」の空間では、慶喜による「親しみ」を前面に出した四侯の懐柔が企図され、国事を媒介にフラットな政治評議の場として機能するという二面性を有していた。

③将軍の「御旅館」には、右の二面性のうち、国事の能動的な部分を象徴するように、幕府周旋方という国事周旋のための組織が設けられ、同所は政治運動の拠点としての性格を有していた。これは、慶喜の将軍就任以前の、「一橋旅館」の性格が引き継がれたものと言え、かつ慶喜自身が国事周旋の最大の担い手として期待されていた。

④慶喜と四侯サイドの度重なる会議は、元治元年の「後見邸会議」という『徳川慶喜公伝』の呼称に習えば、「将軍邸会議」と呼べるものであり、政局の中で四侯会議や摂政邸会議とともに重要な政治の舞台となったが、その調整機能は十分ではなかった。

⑤その「将軍邸会議」で見られた、慶喜の「親しみ」を前面に出した政治的パフォーマンスは、先代の将軍家茂に淵源があるが、慶喜の段階では、度重なる政治的討議を通じて、将軍の諸侯に対する優越的地位は益々崩壊していき、他方で五月二三・二四日の朝議においても、両者は同列に近い扱いとなった。それゆえに、朝議が慶喜の強硬な態度によって決着すると、久光らの強い反発を引き起こした。以後は、つとに原口清氏が指摘するように、慶喜は政治的孤立を深め、[95] 国政の中心は拡散の度を強めていくのである。

最後に、残された課題について言及しておきたい。将軍が長期にわたり二条城に入らないことは将軍権威に関わることであり、それなりに正当化する作業が必要だったはずである。その場合、「御旅館」滞在時の慶喜が、歴代将軍と異なり内大臣に任官していなかったことや、それによって、将軍としての称号が「公方様」ではなく「上様」のままであったこととの関係を問うてみる必要がある、[96] さらに、九月の内大臣任官と、「公方」称号への変更、二条城入城が同時になされた意味と、討幕運動との関係[97]についても検討を要するだろう。

これらの問題が、江戸の幕府機構も含めた慶喜政権全体においてもつ意味など、機会を改めて論じることにしたい。

註

（1）拙著『長州戦争と徳川将軍』（岩田書院、二〇〇五年）参照。

(2) 代表的な著作として、松浦玲『徳川慶喜　増補版』(中公新書、一九九七年年)、家近良樹『幕末維新の個性Ⅰ　徳川慶喜』(吉川弘文館、二〇〇四年)、同『人物叢書　徳川慶喜』(同右、二〇一四年)、原口清『王政復古への道　原口清著作集2』(岩田書院、二〇〇九年)、高橋秀直『幕末維新の政治と天皇』(吉川弘文館、二〇〇七年)など。

(3) 慶喜は、慶応三年九月二一日の内大臣任官と同時に二条城に移っている(『続徳川実紀』五、吉川弘文館、一九八二年、二六八頁)。

(4) 渋沢栄一『徳川慶喜公伝』三(龍門社、一九一八年)、四三四頁。

(5) 例えば、『別冊歴史読本47　徳川慶喜・昭武・慶勝写真集　将軍・殿様が撮った幕末明治』(新人物往来社、一九九六年)所収、「京都での慶喜の「御旅館」―もう一つの将軍の館」(斉藤洋一氏執筆)など。

(6) 拙著『幕末の将軍』(講談社選書メチエ、二〇〇九年)』第五章。

(7) 藤田英昭「徳川慶喜―天皇の血をひく徳川将軍」(笹部昌利編『幕末維新人物新論』昭和堂、二〇〇九年)。

(8) すべて網羅できないが、例えば『京都の歴史7　維新の激動』(京都市史編さん所、一九七四年)二五八～二五九頁、前掲松浦『徳川慶喜増補版』一五七頁、前掲原口『王政復古への道』二〇五頁以下。前掲家近『幕末維新の個性Ⅰ　徳川慶喜』一六一～一六二頁。高村直助『人物叢書　小松帯刀』(吉川弘文館、二〇一二年)一七一～一七四頁。

(9) その際の写真は、各種図録で紹介されることが多いが、『春嶽公記念文庫名品図録』(積善会、一九八三年)の解説文では、二条城で慶喜が四侯を饗応した際に、写真師横田彦兵衛に撮影させたものと説明している(三五一頁)。

(10) 筆者は前掲拙著において、慶喜・四侯会談は若州屋敷で行われたとの見解を示したが(二三七頁)、具体的な実証は行っていなかった。

(11) 松平慶永「京華日録」(『福井市史　資料編5　近世三』福井県、一九九〇年)、五九九・六〇七頁。

(12) 藤田前掲論文、二二六頁。

(13) 京都守護職の会津藩も「御池屋敷」と呼んでいた(「会津藩文書」『史籍雑纂』日本史籍協会、一九七〇年所収、二八六頁)など。

(14) 渋沢栄一編・大久保利謙校訂『昔夢会筆記』(平凡社、一九六六年)、一六五頁。

(15) 『会津藩庁記録』一(東京大学出版会、一九八二年)、七九～八〇頁。もっとも、この件は、藩主容保と重役の考えを受けたものではないと断っている。

(16) 『中山忠能日記』一(東京大学出版会、一九六八年)、四五九頁。

(17) 文久三年一二月一五日付「京都より文通」(『近世庶民生活史料　藤岡屋日記』十一、三一書房、一九九二年、三六四頁)。

(18) 藤田氏が用いた指図は、現在大阪くらしの今昔館に所蔵されているが(非公開)、谷直樹編『大工頭中井家建築指図集　中井家所蔵本』(思文閣出版、二〇〇三年)に「No.一一〇　一橋殿御旅館絵図」として収録されている。また、同一図面ではないが、京都大学の「中井家コレクション」中の「一橋殿御旅館絵図」とその控図が、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」で閲覧でき、文字情報はほぼ同じである。

(19) 幕府倒壊後の慶応四年閏四月、小浜藩は新政府への銃砲調練許可を求める請願の中で、藩主酒井忠氏（謹慎中）が「今般御池通神泉苑町西へ入、元屋敷へ引移申候」と述べている（『復古記』五、マツノ書店、二〇〇七年復刻、三四頁）。

(20) 渋沢栄一『徳川慶喜公伝』二、四三六～四三七頁。

(21) 慶喜は滞京中、若州屋敷だけでなく、河原町の元長州藩の屋敷を借用したとされるが（藤田英昭「幕末京都の新門辰五郎とその周辺」松尾正人編『近代日本成立期の研究【政治・外交編】』岩田書院、二〇一八年所収、八七頁）、本稿は若州屋敷に限定して考察を進める。

(22) 「近衛家表日記」（「大日本維新史料稿本」慶応二年九月四日の条。同史料は東京大学史料編纂所の「維新史料綱要ＤＢ」より閲覧、以下「大日本」）。

(23) 以上、日本史籍協会編『丁卯雑拾録』二（東京大学出版会、一九七三年）、三〇四～三〇六頁。

(24) 例えば、「静寛院宮御側日記」三月一四日の条には、「去ル九日四時二条御城え被為成、将軍　宣下相済候御礼被為請、九ツ時過　御旅館え　還御被遊…」とある（『静寛院宮御日記』二（東京大学出版会、一九七六年、五二七頁）。

(25) 『丁卯雑拾録』一（東京大学出版会、一九六八年）、一一八～一一九頁。

(26) 周知のように、慶応二年一二月五日の将軍宣下儀礼は二条城で行われた。

(27) 『丁卯雑拾録』一、一二～一三頁。

(28) 「鳥取藩京坂書通写」（「大日本」慶応二年九月四日の条）、『中山忠能履歴資料』八（東京大学出版会、一九七四年）、一九五頁。

(29) 当該期の政局については、前掲原口『王政復古への道　原口清著作集2』二〇五頁以下を参照。

(30) 「登京日記」（前掲『福井市史　資料編5　近世三』）所収。

(31) 『越前藩幕末維新公用日記』（福井県郷土誌懇談会、一九七四年）。

(32) 福井県文書館松平文庫所蔵。「幕末福井関連資料ＤＢ」の翻刻データより閲覧できる。

(33) 『伊達宗城在京日記』（東京大学出版会、一九七二年）、「久光公自記上京日録（文久三年元治元年慶応三年）」（『鹿児島県史料　玉里島津家史料』五、鹿児島県、一九九六年所収、一五八頁～一六三頁）。

(34) 『伊達宗城在京日記』（東京大学出版会、一九七二年）一七二、一七五、一八二頁。「久光公上京日録」（『鹿児島県史料　玉里島津家史料』二、鹿児島県、一九九三年）、七四五～七四八、七五三頁など。山内容堂については管見の限り、文久四年正月二五日の春嶽・宗城・久光宛の書翰において、「登城」表現を用いているのが確認できる（平尾道雄編『土佐維新史料　書翰篇二』高知市民図書館、一九九三年、二三～二四頁）。

(35) 『続再夢紀事』二（東京大学出版会、一九八八年）、三八九頁、同三巻の一三・四八頁など。また、前掲『福井市史　資料編5　近世三』四八三頁所収、「一一九」番書翰。この時期将軍後見職であった慶喜も、「登城」と「登営」両方を用いている（『続再夢紀事』二、三五七・三九二

頁）。

(36) 大政奉還を受けて慶応三年一一月八日に再上洛した慶永は、王政復古政変にいたるまで二条城に六回赴いており（福井市立郷土歴史博物館「春嶽公記念文庫」所蔵「滞京日紙」二、三号のうち、一一月一〇・二〇・二八日、一二月二・五・七日の条）、いずれも「登城」と表現している。一方、国元の藩主宛の一一月一六日付書翰には「登営」「登城」両方が見いだされる（伴五十嗣郎編『松平春嶽未公刊書簡集』思文閣出版、一九九一年、七五頁）。側近による前掲「御側向頭取御用日記」（翻刻データの15）の同日の条は、いずれも「登城」に変わっている。家老本多修理の日記は、春嶽の登城を網羅していないが、記述が見える箇所はいずれも「登城」である（前掲『越前藩幕末維新公用日記』参照）。

(37) この傾向は会津藩の記録にも見られる（前掲「会津藩文書」二五八、三〇四頁など）。

(38) 前掲「登京日記」六一七頁。

(39) 同右、六二四頁。

(40) 『伊達宗城在京日記』四四九頁。

(41) 最近では、前掲家近『人物叢書　徳川慶喜』一八六～一八七頁。前掲高村『人物叢書　小松帯刀』一七一～一七二頁など。

(42) 「登京日記」六四六頁。

(43) 同右、六五〇～六五三頁。なお、『維新史料綱要』七（東京大学出版会、一九八三年）は、慶応三年五月朔日の綱文において、慶喜が三者を「二条城」に召したとしており（一一三頁）、誤りであることが分かる。

(44) 『アサヒカメラ』第十三巻第三号（一九三二年）所収、三一七頁（引用史料の読点は筆者の判断で変更した）。この文献情報は斉藤洋一「将軍のフォトグラフィー」（『将軍のフォトグラフィー　写真にみる徳川慶喜・昭武兄弟』松戸市戸定歴史館、一九九二年）の註（38）による。

(45) 『伊達宗城在京日記』五五四頁。

(46) 現在、宗城所蔵写真の現物を確認する機会を得ていないのは遺憾であるが、後日詳しく考証する機会を持ちたいと考える。

(47) 『松平春嶽全集』一（原書房、一九七三年）の口絵写真、『新装版　島津久光公実紀』三（東京大学出版会、二〇〇〇年）二六～二七頁。

(48) 右『松平春嶽全集』口絵には、「京都営中とあるは二条城中のことなるべし」と解説が付されている。

(49) 煩瑣になるので考証は省略するが、例えば、五月二一日に松平慶永は土佐藩邸から慶喜のもとに向かうが、日記には「三条通り、堀川橋、御池通り、御旅館へ登営之事」とある（前掲『福井市史　資料編5　近世三』七二九頁）。

(50) 例えば六月二日の慶永の「京都日記」（前掲「登京日記」とは別）には「八ツ時出門にて御旅館ニ登営」とある（『福井県史　資料編3　中・近世二』一九八二年、福井県、二一〇頁）。

(51) 『徳川慶喜公伝』三、五二一頁。

(52) 例えば、同右の五一一頁には、幕府が「五月八日命を伝へ、「四人相談の上、一両日の中登城すべし」といえるに…」との叙述があるが、慶永の「登京日記」の同日の条では、「五ツ半時」板倉より留守居が呼ばれ、「松平大蔵大輔・島津大隅守…右申合之上一両日之内登営有之候様」と申し渡されており（六七五～六七六頁）、『伊達宗城在京日記』でも、「板閣より　留守居へ四人申合無故障同次ニ可致登　営旨申聞られ候也」とあり（四七〇頁）、「登城」では無い。他にも五一二・五一九頁などの叙述を、すでに行った本稿での検証や、右の日記類と比較されたい。

(53) 前掲『新装版　島津久光公実紀』三、一九～二七頁。

(54) 『山内家史料　幕末維新　第六編』（山内神社宝物資料館、一九八四年）、一六六頁以下。

(55) 『丁卯雑拾録』一、一〇八～一一〇頁。

(56) 『丁卯雑拾録』二、二七五頁以下。

(57) 尾張藩による「京武阪風説」（「大日本」五月二八日の条）。

(58) 鳥取藩による「風聞記」（同右、同日の条）。

(59) 「京都日記」二〇九・二一五頁。同日記では、一一日の場所については「於御白書院替席御目見有之」としているが、「黒書院替席」の誤りと思われる。ちなみに、慶永にとって細川家は正室の実家であり、澄之助は義弟にあたるため関係は密接であった。

(60) 「登京日記」七〇〇～七〇一頁、「慶応丁卯筆記」（「大日本」慶応三年五月一四日の条）。

(61) これらの部屋の具体的位置については、一橋時代の「御旅館」の指図（註18）では特定することができない。

(62) 「慶応丁卯筆記」（「大日本」四月二〇日の条）、「登京日記」七二九頁。

(63) 幕末期の二条城の絵図面（後述）では「桜之間」は確認できないが、江戸城には白書院近くに存在した（「幕儀参考増補」『松平春嶽全集』一、五二六～五二七頁）。

(64) 「登京日記」六八七～六八八頁。『続再夢紀事』六（東京大学出版会、一九八八年）、二一七～二一八頁。

(65) 「登京日記」六九三頁。『続再夢紀事』六、二二二～二二三頁。

(66) 前掲高村『人物叢書　小松帯刀』は、この五月一〇日・一二日の久光の発言を、二条城への登城についてのものと解釈し、当時の久光評価の参考にしているが（一七四頁）、一〇日の久光の発言に対して、慶永と宗城がその不安を和らげるべく四月二〇日の「御旅館」への登営（表1）の状況について語っていることから見ても、焦点は「御旅館」への登営だったのである。

(67) 前掲拙著『幕末の将軍』は、幕末期の将軍を「権威の将軍」と「国事の将軍」で対比したものであるが、若州屋敷の権威装置の部分については、考察が不十分であった。

(68) 松平容保の世子余九麿（喜徳）についても、六月七日に将軍慶喜に初の御目見、同二八日には元服の規式が行われたが、いずれも場所は

「御旅館」であった（「会津藩文書」二八七～二八八頁）。

(69) 大坂城については、篠崎佑太「幕末期大坂城における儀礼」（前掲松尾編『近代日本成立期の研究【政治・外交編】』）が、幕末の将軍滞坂に際して最低限の儀礼が整えられたことの意義について論じている。

(70) 西和夫・荒井朝江「幕末・明治初期に二条城本丸に存在した徳川慶喜の「居室」について」（『昭和62年度　日本建築学会関東支部研究報告集〈計画系〉』一九八七年、三五〇頁）、『二条城』（松戸市戸定歴史館、一九九四年）の図版解説（一〇〇～一〇一頁）、同書所収の西和夫「二条城の建築」（七九頁）、註（5）「京都での慶喜の「御旅館」。

(71) 『松平春嶽全集』一（原書房、一九七三年）、三四六頁。この中で、慶喜が将軍宣下後は二条城に住居したと述べているのは、記憶違いであろう。

(72) 古写真に写る本丸仮御殿について、前掲註（70）『二条城』所収の図版解説（一〇〇～一〇一頁）は、先代の将軍家茂の時期にすでに本丸に仮建物が存在した可能性に言及しつつ、慶喜による仮御殿については「いかに財政窮乏の折りとはいえ将軍の御殿としてはあまりに質素なもので、大急ぎで建設したという感じが写真からも伝わってくる」と述べている。

(73) 松平慶永の慶応三年七月三日の日記に、「夫より同寺（南禅寺）内金地院へ参ル、二条御城御普請と同様まことにきれい結構なり、…」という記述があるので（「京都日記」一三五頁）、着工は少なくとも六月以前ということが分かる。また、前掲「逸事史補」に「余上京之頃、普請最中也。其後落成ス」とあり（三七四頁）、慶永の滞京期間は四月一六日～八月六日であるから、この記憶が確かなら、解釈の仕方によっては着工時期は四月以前に遡る可能性もある。

(74) 将軍家茂の滞京（文久三・元治元年）中の二条城二之丸御殿内部を知るうえで参考になるのが、家茂二度目の上洛時に奏者番を務めていた増山正修（伊勢長島藩主）の日記写（「御上洛御供日記」）に付属した絵図類のうち、「二条御城御絵図」「二条御城御席図」の二つである。これは増山の若年寄昇進後に奏者番に就任した内藤頼直（高遠藩主）より、同じく同役の内藤正誠（岩村田藩主）が日記と共に借り写したもので、将軍滞京に伴う二之丸御殿内部の奥向を含めた増築状況が分かる価値の高い史料である（国立国会図書館古典籍資料室所蔵、史料番号一五五―八五。その日記に同じく付属する大坂城の御殿図は、前掲篠崎論文が使用している）。この史料により、家茂上洛前の文久二年段階で計画された、二之丸御殿の奥向始め内部の増築計画（元離宮二条城事務所所蔵「文久二戌年二条城中二丸御殿向并仮建物絵図」『二条城展』江戸東京博物館、二〇一二年所収）は、少なくとも家茂二度目の上洛時には実行されていたことが分かる。他方で、この文久二年の増築計画は、慶応三年秋と推定された古写真において、白書院の北側に、増築予定の奥向関連の建物が写っていないため、実行されなかったとする見解がある（『古写真に探る幕末徳川の城』松戸市戸定歴史館、一九九九年、四七頁の解説）。しかし、筆者は将軍滞京中の状況を知り得る文献史料から、右の増山日記付属の二つの絵図に描かれた、大広間南側の二百畳からなる建物（文久二年段階の増築計画に含まれる）が、文久三年の第一回将軍上洛時には実在したことを指摘している（拙稿「徳川家茂の学問」『大東史学』創刊号、二〇一九年、五五頁）。また、後述するよ

うに、文献史料に見える「一橋控所」の該当部分も、文久二年の増築計画に含まれていたことなどから、第一回上洛を契機に、奥向を含む二之丸御殿の主要な整備・増築がなされたものと現段階では見ている。もし、右の古写真との整合性を問われれば、奥向の増築部分は仮建であるため、慶喜の宗家就任以後に解体されたものと考えるほかない。慶喜がわざわざ本丸御殿を築いていることから見て、家茂期の奥向増築部分は不要になったのだろう。当時は禁裏御所でも仮建の増築と撤去は短時日に行われている。今後さらに検討したい。

(75) 『続再夢紀事』五（東京大学出版会、一九八八年）、三五六、三七二頁。

(76) 前掲『幕末の将軍』二三五～二三六頁。

(77) 慶喜政権の性格については、家近前掲『幕末維新の個性Ⅰ　徳川慶喜』一三九～一四〇頁を参照。

(78) 以下「登京日記」六二七～六二八頁、『伊達宗城在京日記』四四九頁。

(79) 『伊達宗城在京日記』四四九頁。

(80) 「登京日記」六二四～六二五頁。

(81) 同右、六九八頁。

(82) 同右、七二〇頁。

(83) 『中山忠能日記』四、二三九頁。

(84) 例えば、『維新史料綱要』七には、鍋島斉正が七月一九日に「二条城ニ登リ、大将軍徳川慶喜ニ謁シ…」とあるが（一八七頁）、鍋島・浅野とも（浅野は六月二六日）、「登営」すると「大廊下替席」で老中に謁し、「御休息」で慶喜に御目見するという流れが四侯と同様であり、「御旅館」での謁見と判断できる。

(85) 肥後藩士の登営状況は、『改訂肥後藩国事史料』七（国書刊行会、一九七三年）、三七七～三七九頁。

(86) 「登京日記」六七八～六七九頁。

(87) 加藤弘之「幕末期京都における一橋徳川家用談所」（『国史学』一九二号、二〇〇七年）参照。なお、諸藩の周旋方については、拙稿「長州戦争期の政治運動と『公論』」（『日本史研究』四七八号、一九九九年）では岡山藩を事例に扱ったが、近年のまとまった成果として、天野真志『幕末の学問・思想と政治運動』（吉川弘文館、二〇二一年）などがある。

(88) 『木戸孝允関係文書』四（東京大学出版会、二〇〇九年）、二五三頁。

(89) 『続再夢紀事』六、一八六～一八七頁。「登京日記」六六七～六六八頁。

(90) 拙著『幕末の将軍』第四章以降を参照。五月一四日の四侯登営の際、慶喜は老中をともなわず一人で四侯との会談に臨んだが（『伊達宗城在京日記』四七九頁）、家近氏は「このような将軍は前代未聞であった」として、老中と諸役人が実質的に幕府の最高意志を決定する慣例を慶喜が打ち破ったとして、慶喜政権の特色のひとつに数えている（前掲『幕末維新の個性Ⅰ　徳川慶喜』一六二頁）。

(91) 以上『伊達宗城在京日記』三一二、三四一頁。註(34)「久光公上京日録」七五二頁。

(92) この時期の二条城の各部屋が持つ機能や利用状況は、家茂の奥向空間の拡張などとの関連なども含めて別途考察する必要がある。「一橋控所」とは、前掲増山日記付属の「二条御城御席図」では、「表」の大広間から黒書院にいたる間に、御用部屋と並んで設けられている。文献では文久三年三月には、伊達宗城の日記にすでに「一橋部屋」として名称が見えている(『伊達宗城在京日記』一六三頁)。

(93) 「登京日記」七四二頁。

(94) 久光の反応については、慶応三年六月一八日付島津茂久宛久光書翰(『鹿児島県史料　玉里島津家史料補遺南部弥八郎報告書二』鹿児島県、二〇〇三年、七四〇～七四一頁)。また、同じく伊達宗城の反発について、原口氏は将軍権威が盛んなときには感じられるものではないだろうと述べている(原口前掲書、二四三頁)。

(95) 原口前掲書、二四五頁。

(96) 前掲拙著『幕末の将軍』は、この点に言及しているが、改めて検討したい。

(97) 家近良樹『人物叢書　徳川慶喜』(吉川弘文館、二〇一四年)は、慶喜が若州屋敷から二条城に居所を変えたのは、薩摩藩などの武力蜂起に備えたものとしている(二〇二～二〇三頁)。

【付記】

本稿作成にあたり、史料閲覧に際しては、福井市立郷土歴史博物館の印牧信明氏および山田裕輝氏、京都市元離宮二条城事務所の今江秀史氏に大変お世話になった。また、明治維新史学会員の中川壽之氏にも種々のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(二〇二一年九月一五日脱稿)